

昭和初期手工教育の実際  
—加茂農林学校における木工による手工教育を探る—

齊藤 暁子

## 概要

本研究では昭和初期岐阜県加茂農林学校教員であった長尾和男の実践を取り上げた。その実践は、木を最大限産業化に生かし、農村更生につなげたいという理想視点を持っていた。そして教育課程では、「一人一研究・自己訂正・互教育」など、生徒の自発的自主的学習を促す教育観や、「正確な知識と技術」を学び生活につなげていく指導の工夫があった。しかし、その実践は地域に根付かなかつた。また、同時期、より木工が地域産業として根付き成果をあげた、岐阜県古川小学校の山下泰助の実践を、郷土化の中での手工教育例として取り上げた。

## 1. はじめに

日本において、初めての工作科教科書の編纂者のひとりである山形寛が「日本美術教育史」の冒頭「はじめのことば」のなかで次のように述べている。

「…前略…美術教育の本質は、むしろ学校における美術教育にあるのではなく、庶民の生活そのものの中にあるのがほんとうではないか、生活そのものの中にある美術教育がより重要なのではないかと考えた。…中略…農作業や家庭生活、年中行事等の中で、おのずから美的教育が行われていたのであるが、自給自足の生活面の後退と共に、生活の中における美的教育も後退し、それに代わるものとして学校教育の中における美的教養の必要性は増したと考えられるが、今日の美術教育がはたしてその目的を達しているだろうかと疑問を生じ、それをただす意味では、学校教育の中における美術教育の変遷の研究調査よりも、庶民の生活の中における美術教育変遷の調査研究の方がより重要なのではないかと思われた。…後略…」<sup>1</sup>

庶民の生活の中における美的教育とは、いかなるものを指しているのか。そして、学校教育の中の美術教育の変遷を研究し著した山形が、なぜその疑問にたどり着いたか、予測することは難しい。しかし、子どもたちの生活や社会につながる、つくる教育への危惧ではないだろうかと考えられる。「庶民の生活の中における美的教育」という観点が本研究の一つの視点を今後与えることとなる。

過去には、学校教育の中に、子どもが、家庭にない文化を見つける時代があったのではないだろうか。家にはないオルガンがあり、本があり、社会を紐解く知識がそこにはあった。そしてその知的陶冶としての新しい視覚文化を知る図画教育、そして、手工という実業的学習が位置づいていた。

明治19年森文部大臣によって普通教育に手工科が加設され、随意科として尋常小学校補習科にも加えられた。明治33年には他の実業科目とは別に普通教科として小学校令の中に取り扱いを明示された。しかし、明治40年代には実業科としての色彩を濃厚にして教授時数を増加していった。昭和10年発行の『手工研究 手工教育五十周年記念号』手工教育五十周年記念大会記式辞の中で、阿部七五三吉は、次のように述べている。

「…前略…我が手工教育五十周年間ノ歴史ニハ、頗ル感慨多キモノガアリマス。本教育ノ創設ノ際ハ、人間教育トシテノ手工教育デアルニモ拘ハラズ、職人又ハ労働者ノ仕事トシテ、一般社会人ハ勿論、教育社会カラモ排斥セラレタコトガアリマシタ。或時ハ単ニ価値ナキ教育トシテ、普通教育ノ教科カラ全然廃止セラレントスル議サエモ聞ハセタコトモアリマシタ。…中略…カクノ如クシテ、手工作業ノ教育ハ、幾度カノ紆余曲折ヲ経テ、今ヤ心理的ニモ、訓育的ニモ、経済的ニモ大イニ必要ナル教育ト認識セラレルヤウニナリマシタ。手工教育ノ開祖、上原六四郎先生ガ百聞ハ一見ニ如カズトイフ言葉ニ、更ニ附加ヘテ、百見ハ一試ニ如カズト教ヘラレタ金言ハ今ヤ各教科ノ教授ノ上ニ實現セラレントスルニ至ツタコトハ、洵ニ欣快ニ堪ヘマセン。…後略…」<sup>2</sup>

軍事国家を進め富国強兵を目指す政策により、浮き沈みする教育の価値観の中で揺れ動く手工教育の扱いを

嘆き、「人間教育」としての手工教育の存続を切望している。そして、時の文部大臣松田源治は、祝辞の中で、次のように述べている。<sup>3</sup>

「…前略…普通教育ニ於ケル手工科ノ使命ハ、児童ノ創造性ニ訴ヘ、構想技巧ノカヲ養成シテ工作ノ趣味ヲ長シ、一方實務ニ習熟セシメツツ勤勞ヲ愛好スルノ習慣ヲ養フニアリマス。殊ニ昨今教育上知識偏重ノ弊ヲ云為セラルルノ愁、手工教育ニヨツテ情操ノ滋養ニ勉メ品性ノ陶冶ヲ図リ日常生活ニ即セシムルハ、正ニ緊切ノ要務ト謂フベキデアリマス。…後略…」

松田は、職業教育としてだけでなく、情操教育としての認識を表していた。情操といっても、戦争の色に深く染まっていきつつある時代の中、実際は、研究者・指導者は、地域や、ひいては国家を支える人々の育成を考えて、西洋視覚文化を教えるため、改革を進めていた。研究者自身というより、人々の「人間如何に生きるか」という問いに答える個々の尺度を育てる、「生」への平等な知恵を獲得するための学校の、普通教育としての手工教育の理想はどうていみられない。

しかし、阿部と松田が言い表す背景にある庶民の「生活」と、当時困窮する農民に目を向けて真実の生活を捉えるための教材として郷土を見つめた地方の教師達の「生活」は明らかに違い、前者は心情的・抽象的に日本主義教育の一つとして「生活」をとらえ、それを豊かにするものづくりとして、その先、主観的郷土教育に結びついていく。後者は、実証主義的対象としての「生活」でのものづくりを通しての人間形成を展望し、社会科学的に「生活」を厳しく捉えつづけていく。<sup>4</sup>

昭和16年の小学校令の公布により、図画と共に必修科目として、手工科は、工作科となった。この時、初めて児童用の教科書が編纂されたのである。昭和18年には中学校令が公布され、芸能科としての工作が始まろうとしていた。教科書も、題材名(学習内容)で編まれ、従来の材料からまとめられるものから大きく変わってきている。しかし時代は敗戦への混乱の中、ほとんど実施されるには至らなかった。

本研究は、岐阜県という非常に限定した地域での「庶民の生活」に密着した手工教育実践の実際を探る。そして、手工教育実践を、その風土と人々の言葉から顕現化する。そのことは、「庶民の生活」の中に残った教育の歴史研究として、位置付くと考える。また、戦後ものづくり論の展開が奔走する前の公教育としての手工教育研究対象として、昭和初期と限定した。

昭和初期の研究者の手工観と、実践者の手工教育観をとらえ直し、職人の徒弟制度とは違った、当時の人間教育としての手工教育の意味を解明するものとした。更に、その当時の実践が成果をあげた背景、教師の実践を支える理念や感情にも迫ってみたいと考える。

農民の更生制度の中では奔走する実践者たちは地域文化の違いや、歴然たる格差の中で残らず衰退していったものも現実にはあった。

## 2. 昭和初期岐阜県の手工教育の実践

山形寛は、『手工・工作教育被欺史』<sup>5</sup>のなかで、手工が、社会政策面でみても、産業からみても、近代化のなかで、国策のため、揺れ動く様が伺えるとしている。また、日本手工教育研究会編『手工研究』手工教育五十周年記念号、1935年。をみても、翻弄する様が描かれている。しかし、当の実践者や子ども、そしてその時代のものづくりの当事者は、創造的なものづくり、手工教育の実践を実現している。翻弄される現代や過去を嘆くよりも、その揺さぶりによって見えてくる教科や素材、行為の本質を見ることが大切である。

地域の風土、時代の背景との関係性や「木」というものの時代的存在価値の変化が作用要素として大きな位置を示している。また、自然・社会の現実的立脚点からの理解という特徴から、様々な切り口を持ちえている。

職人や実践者が話す意見自体にのみ注目するのではなく、その背景を取り込んだ上で、明確な自己を内在して意見が言える自我に、当時の教育のもつもうひとつの側面を推察することができるのである。

ゲーリー・スナイダー(Gary Snyder)<sup>6</sup>は、文明の不健全さを「文明自体が肉体労働を避けようとしていること」とし、その弊害を次のようにあげている。「最初に、自分に代わって仕事をやってくれる……エネルギー源を探し求めること。つぎに、自分の身体が何ができるか、食物や水がどこからやってくるのか、それがわからなくなってしまうこと。三つ目には、仕事をとおして得られる、精神と肉体のバランス感覚を見失うこと。」<sup>7</sup>美術教育の役割は、自己の存在を明らかにし、文化を作り出す力を育てることに他ならない。社会をサバイブしていく力とは明らかに異なる、生活や造形文化自体を作り出す力を育てる教育として現在まで受け継がれていると筆者は考えている。言い換えれば、体という最も身近な自然を通して、事象を理解し表現することから、

昭和初期手工教育の実際  
—加茂農林学校における木工による手工教育を探る—  
齊藤 暁子

自分の中に考える中心点が育つ総合的学びではないかと考える。

**(1) 大正末期から昭和初期の全国における手工教育観**

明治期から普通教育に定着しなかった<sup>8</sup>手工が、大きく変化の時を迎える。

大正 15 年の小学校令改正により、手工科が必修となった。手工は、職業教育としてから普通教育として位置付くことになったのである。このことにより、手工を取り巻く理論は、図画手工同一論<sup>9</sup>または、自由画教育運動<sup>10</sup>を受けて創作手工<sup>11</sup>等、理科的手工<sup>12</sup>の流れだけではなく多様な発展をする時代を迎えた。

しかし、手工は、芸術教育として定着したとは考えにくい。現に山形によると、彼自身が東京女子師範学校附属小学校に奉職していたとき、「ある日千葉県のある小学校長が、参観にきて『あんな面倒なものが必修科になってどうするんですか。その中また法令の改正があって、再び、加設科目になるのでしょうか。そうしてもらわなければならぬ。あんなもの本気でやる気がしない。』と放言した者もあつたくらいである。」<sup>13</sup>と、当時の様子を記している。

大正 15 年 4 月 22 日付文部省訓令第 10 号の「小学校令及び同施行規則中改正の要旨並びに施行上の注意事項」をみると、以下のように記されている。<sup>14</sup>

「近年国民の向学心の進歩に伴いて尋常小学校卒業者の高等小学校に入学する者年々その数を増加し、最近の統計に依れば其の割合百分の五十五に達するの状況なり、亦以て高等小学校が教育制度上重要な位置を占むるを知るに足らむ。従つてその制度を改善して之が充實を図ることは真に当今の急務と謂わざるべからず。義務教育年限の延長に就きて世上熱心なる主張あるに拘らず今尚これを實現し得ざるを遺憾とすれども高等小学校を改善し、地方の事情に適切なる教育を施すに至らば今後一層多くの入学者を收容することを得、義務教育年限延長実施の時期を促進し、更に円滑に之が実施を期することを得べく、又彼の相競うて中学校の門に走り、而も半途にして退学せざるを得ざるが如き者をして、初めより安じて高等小学校に來り学ばしめ中学校入学難の弊を救済するの一助たらしむことを得べし。」

「今回の改正が高等小学校の教育をして實際生活に適切ならしむことに力めたること前述の如しと雖も高等小学校は固より普通教育を施すことを本義とするものにして、尋常小学校に於けるよりも一層進みたる程度に於て道徳教育及び国民教育に力を尽くす必要あり。」（下線は筆者による。）

地域社会を即支える人材として、実業を求め子どもに対しては、技術教育を施していくという姿勢が顕著である。しかし、中学校に進学し、勉学に向かう上流もしくは都市部の子どもにとっては、徒弟制度のような教育は卑しく必要ではないという気風が強かったと考えられる。<sup>15</sup>

その背景としては、米価の自由化や、地震、飢饉などによる、農村の困窮とその更生に向けての政府の動きに関係するところが大きいといえる。大正 12 年には関東大震災が起り、米騒動もあいまって経済情勢もゆれていた。大戦後のデフレも安定せず、昭和 4 年にアメリカで始まった世界恐慌の影響を受け、デフレ傾向は一層拍車がかかり、日本の金解禁の政策によって、米価、繭価などにも影響を与え、輸出が減り、昭和 6 年からは、本格的な農業恐慌へと広がっていった。満州事変以後は五・一五事件直後、第 26 臨時国会から農村救済の請願が殺到した。政府は、「自力更生」を訴え、「農山村漁村経済更生運動」を実施していった。<sup>16</sup>

『日本木材工芸』第 1 巻<sup>17</sup>をみると、農村の副業開発、芸術工芸品の促進によって、更生につなげる多くの取り組みを知ることができる。ここには、岡山秀吉をはじめ、木工に関わる多数の研究者実践者が寄稿している。直接地域を支える確かな労働力と、地域による資源の最大利用と開発など、実業としての研究・実践が、木工というテーマで、教育から新技術、機械開発に及んで記述されている。この資料からもうかがえるのだが、手工教育は、実業教育として都市部より、手工を風土として必要としている地方での発展が著しいといえよう。

「農村教育運動」「民芸」「農民による芸術」など、生活に密着した手工芸についての再評価と、価値付けが各地の実践を交えて取りあげられている。手工教育の定着と、発展には、小学校令改正の背景にある社会経済政策の影響によるところが大きく、必ずしも芸術教育・情操教育としての座標軸ではなく、職業・実業教育として、社会経済更生と発展の急務の中にあつたといえるのである。

岡山の科学教育と発明・工夫を柱とする手工教育や「理科的手工」とは違い、芸術教育、児童中心主義を柱とする「創作手工」は、自由手工、芸術手工ともよばれ、石野隆らによって協会も設立された。石野は手工科の使命を「模索主義を排して、極力真の生命美に触れる創作に依ることが根本」<sup>18</sup>と述べた。<sup>19</sup>しかし、本来手工には、どちらの要素もあり、分断したことによって、子どもを子ども扱いしたものづくりになってしまった

と考えられる。むしろ、子どもを全人的に考えると、「理科的手工」も生活者として必要で、大人が作り上げた、限定した「子ども像」の視覚文化や創作世界を作り出したとはいえないのではないかと考える。また、当時の子どもが置かれている立場から、地域に労働力として出て行く子どもにとっても、進学し帝国大学を目指す子どもにとっても、情操教育として位置づいていかなかった。

しかし、実践者達は、実際目の前にしている子どもに応じた子どもに最適な教育を追求していくはずである。本研究で、筆者は、理科的手工の中に、創造的な部分を取り入れていく実践もあったのではないかと予測を持った。中西忠節の実践のなかには、こうした取り組みがはっきりと現れていたのである。<sup>20</sup>

## (2) 大正期から昭和初期岐阜県師範学校手工科の実践

まずは、当時の手工教師が学んだ岐阜県師範学校の様子から記すことにする。

岐阜県師範学校手工科の教官は、東京高等師範学校から代々迎えられていた。伊藤信一郎<sup>21</sup>をはじめとして、千島久治<sup>22</sup>、鈴木孝英<sup>23</sup>らの考えを当時の資料<sup>24</sup>から窺うことができる。大正から昭和にかけての多彩な教育思潮のなかで、多くの研究者・実践者が活発に手工教育説を展開していた。その中で、彼らは、手工の地位向上と、普通教育としての手工の位置付けに尽力し、芸術的手工より理科的手工を強く打ち出している観がある。

大正8年まで岐阜県師範学校に数年間在職した伊藤信一郎の手工科教育は、後に著される『工業大意』『手工教授学』に見られるように、目的の中心を普通教育の一般的陶冶に置かれることを説きつつ、実用的・職業的特質をもつ教科ゆえの工業的趣味の伸張を打ち出していたと考えられる。彼は、その学習環境を整えることを提案し、教育的手工の理念を、手工教授の目的、手工教材の選択にわたってより実践的に教育説を著した。<sup>25</sup>

伊藤の意思を継いだ後任の鈴木孝英の尽力もあり、動力機を備えた工作室建設が実現したのは大正12年であった。それ以降県内各地の小学校に、師範学校同様、動力機を備えた工作室建設が広がることとなった。

当時の様子を鈴木は、次のように記している。<sup>26</sup>

「…五馬力モーター帯鋸機・鉋機・角孔機・ボール盤・木工旋盤・金工旋盤・送風機・動力用ミシン機・粘土焼成窯・等で大體完成させたのである。…中略…設備の充実といふことは、該科の振興上極めて重大であるといふことは今更いふまでもないが、其後の生徒の本科に對する努力が従来より倍加したことは事實である。…生徒の製作能力が數倍し、それが成績とか點數とかを超越しての作業であるから實に愉快である。…」

また、伊藤は、東京高等師範学校に戻ってからも、昭和4・5年の文部省による中等教員に対する作業科及び実業科の夏期講習会<sup>27</sup>を開き、昭和6年から9年まで4ヵ年継続して臨時講習<sup>28</sup>を開くなどして作業科の普及に尽力した。昭和8年には工作科教員の検定制度に関わって、高山西小学校の中西忠節と出会う<sup>29</sup>。中西は優良教員として免許を得ている。中西は、20代半ばにして既に在任校に動力機を備えた工作室を設けて、日々授業実践していたのである。そして、同時に、理科実験室も設計し、本人は理科主任でもあった。

昭和11年に高山西小学校で行われた手工教育研究発表会には、全国から来校との記録があるが、その後の火災で資料は見つかっていない。しかし、西小学校の当時の学校日誌と若干の授業記録から、足跡がわかる。中西自身が保管していた写真には、当時の手工講習会の主要人物がのっており、その人物が特定できると、当時の岐阜師範学校の手工実践研究の記録に残すことができる。また、日本手工教育研究会編『日本手工教育』、手工教育五十周年記念号、昭和10年に載っている、勅使河原太右衛門、大村守五、北川久次ら岐阜県の手工実践者、そして、「愛工会」という岐阜県の手工研究会が開かれていた。

## 3. 加茂農林学校の手工教育

ここでは、昭和初期岐阜県加茂農林学校教員であった長尾和男の実践を取り上げる。

長尾和男は『日本木工藝』、日本木材工芸協会、京都帝国大学農学部、丸三書店、昭和8年号、昭和10年号へ投稿をしている。『作業教育的に見た木工』からは、当時長尾が木工による手工教育を通して行いたかった、身体的作業による教育を重要視する実践姿勢がみることができた。

昭和初期手工教育の実際  
—加茂農林学校における木工による手工教育を探る—  
齊藤 暁子

表 1-1 実業教育費国庫補助内訳<sup>130</sup>

府縣	管理者	学 校 名	施 設	補助金額
茨城	縣	茨城縣立小湊農	農林産加工施設	800円
富山	市	市立富山工業	木材乾燥施設	4,000
石川	縣	石川縣立津幡農産	冬期及雨天ニ於ケル副業的教育施設	1,000
長野	縣	長野縣立下伊那農	農村牧畜工藝施設	800
岐阜	縣	岐阜縣立加茂農林	農村工藝施設	600
愛知	縣	愛知縣立安城農林	動力木工施設	1,000
京都	市	京都市立第二工業	薄板練付設備	2,000
鳥取	縣	鳥取縣立日野農林	林産加工設備	700
徳島	縣	徳島縣立農業	農村工藝施設	800
香川	縣	香川縣立工藝	鑄造及噴霧塗裝漆液乾燥装置設備	4,500
福岡	縣	福岡縣浮羽工業	木材乾燥室設備	2,000
計		11校		18,200

この機関誌は、京都帝国大学農学部木材工藝研究室を中心とした「日本木工芸協会」から発行されている。この協会を立ち上げていた加藤正育の、「農山漁村の副業としての農村工藝」（昭和8年寄稿）から当時の教育を取り巻く情勢を感じ取ることができる。

加藤の考える木工芸観には、『民藝』にも寄稿があるが、当時の「民芸」の観点からは程遠いものづくり観があるのである。木という地方の産物を最大限に工業化、産業化によって生かし、農村更生につなげていきたいという理想視点がある。長尾もその考えを強く取り入れている。

しかし、特記したいのは、その教育課程の中に、「一人一研究・自己訂正・互教育」など、生徒の自発的自主的学習を促す教育観があったこと。また、初等教育、中等教育における手工教育充実への言及「正確な知識と技術」を自主的に学び生活につなげていく指導課程の工夫があったのである。加茂農林学校には、600円の実業教育費国庫補助が昭和9年に支給されている。<sup>31</sup>それは、農村工藝施設という木工芸に関する設備の補助として使われた。補助支給学校全111校中11校が木工に関する国庫補助を受けた。

表 1-2 実業教育費国庫補助内訳<sup>232</sup>

種 別	学校数	申請学校数	決定学校数	金 額	平均一校當補助額	最高額
工業学校	113	94	17	50,700円	2,982円	4,500円
農業学校	338	288	65	51,200	788	2,000
商業学校	324	145	17	14,300	841	1,000
水産学校	13	13	12	33,800	2,817	3,700
計	788	540	111	150,000		

この機関紙の中で長尾は学校紹介として加茂農林木彫部を更に詳しく紹介している。<sup>33</sup>実際に農村民の生活向上を願って行われた木工による手工教育が記されている。

地域の新副業として、人形などを作り、観光地などで売っていたという活動が記されている。また、「又近時海外へも『日本の風俗人形』として日本の風俗・国情の宣伝のために着々と進出しつつある。我が校に於いても昨年満州国執政府に献上御採納を得、今年大連の満州博覧会百点を出品し、又南米ブラジル、北米ニューヨークにもそれぞれ出荷し進出を企てている。」と活発な進出状況を著している。農山村にある農林学校として、実業教育をすすめる、農山村においての副業を地域に広めていく使命を持って実践していたようである。

特に「E 木彫教授の概要」として、「(1) 一人一研究、(2) 自己訂正、(3) 互教法、(4) 勤労、徹底的

な勤労, (5) 構成創作, (6) 作業進行表, (7) 製作予定表」と、項目を分けて自己の教育実践を教育的にまとめたことが窺える。そして、互教法では、生徒同士が教えあう教育課程を設定し、ただの教師による技術伝授だけでなく、より教育効果が上がるよう、集団学習のよさを生かしているといえる。また、一人一研究、自己訂正などの重視によって、一人立ちできる人間教育をうたっている。

高山西小学校の中西忠節の作業教育方法にも共通する点が窺える。「勤労, 徹底的な勤労」という書きぶりからも、決して今日のような温かい教えあいというよりは、技術習得や作業姿勢に対しては、厳しく指導にあたっていたことが推測される。

更に長尾和男は、論文に、私見の一端としながら、自身の実践について考えをまとめている。

木工による手工教育は、「作業教育に見た木工」<sup>34</sup>として、健全なる身体をつくるという点でも、品性陶冶の方面でも美術創作心の育成の面でも非常に価値があるとしている。従来の知識偏重の学校ではなく、職業に必要な基礎的態度を養うのに、木工による作業教育は最適としている。そうした一方で、まだまだ手工教育を取り巻く現状は厳しく、「結語」に、

「我が国教育実践界の現状をみるに初等教育に於いても中等教育に於いても近來手工教育の必要が提唱さるに至ったとはいへ未だ実践に進んでいないのは甚だ遺憾である。即ちまだまだ多くの教師が手工労作を御義理的に行ひ木工の時間に労力を費やすよりも高等学校入学試験のための算数問題の暗記や漢字の書取に主力をそそいでいる小学校の現状であり、中学校に於いて実務科を置き木工を課している学校に於いてすら教師は甚だ厄介視し生徒の空気も従来へ偏知弊習の惰性によって甚だしく軽視しているの現状である。」

と、当時の実践者の苦悩を窺うことができる。<sup>35</sup>

ここで引用にした『日本木材工芸』には、「岐阜堤燈」についての調査研究も載っており、全国の地域の手工芸に対する技術の般化は当時から注目されていたようである。

長尾和男と同時期の手工教育の実践者として、山下泰助を紹介する。長尾の実践は戦後終息をたどったが、山下の実践は、戦後地域に定着していく。この違いは、木工が産業素材として地域により適合していたと考える。山下泰助は、岐阜県吉城郡古川町の古川小学校に手工室を作った人物で、奈良女子師範学校の工作室などに見学を訪れたことなどがわかっている。また、山下は、『岐阜県教育』<sup>36</sup>に多くの論文を載せているが、第421号昭和4年7月「我校に於ける手工科経営の実際<高等科男児を中心に>」や、第461号昭和8年1月、研究「手工科に於ける木材着色に就いて」等がある。「我校に於ける手工科経営の実際<高等科男児を中心に>」は、東京高等師範学校附属小学校内初等教育研究会手工工業協議会で発表した内容である。特に、「我校の手工科動力機械設備」として昭和3年に所要経費3千円で作った手工教室完成の報告は、高山西小学校と並んで、岐阜県下の地方の動力設備ではまだまだまれな成果であり、評価される。

山形寛によると、大正15年の調査<sup>37</sup>によると、設備された学校の一覧102校のほとんどが、大阪市35校、東京市24校、金沢市10校をはじめ、大都市に集中している。<sup>38</sup>

「境遇的に恵まれない高等小学校の子供に一町村として千円や二千円の費用を投じて、彼等の幸福なる将来を築くことが出来たら其程安い事はない。(中略)機械を使用することに依いて工業上の常識を養うことである。殊に山に取り囲まれている我が郷土としての木工機械に接する事は、どれ位将来の生活と交渉を持つかもしれない。(中略)よく機械になれることである。初めて機械を運転させた時は恐ろしい様である。そして機械に迫られる様であるが、だんだん使用していくうちによく馴れてくる、そして親しみを持つ様になる。又手細工と機械細工とは余程違ふ、機械を使う能力は手細工では養ふことはむづかしい。尚動力機械を備付けることは、工業科手工科の気分を高めるといふ点からも大変有効である。」

と、山下は動力機械の導入について述べている。<sup>39</sup>古川の地域の手工教育を町の後継者に対する強い使命感を以って推進していた様子がわかる。しかし、長尾の実践の環境よりも、尋常高等小学校の子供たちの、放課まで制作したという当時の反応からして、直接就業に関わることもあり、随分興味深く取り組んでいた積極的な地域環境であったようである。

当時古川小学校の手工室建設への動きとあいまって、高山西小学校でも手工室が着工された。予算も比較的苦勞なく得られ、古川小より先に完成をみることになる。行政としても、木工による手工教育が、山間地域の産業の担い手としての子供たちに非常に重要な教育と判断し動いたのである。

山下の郷土化教育としての手工観があらわされているのが「手工郷土化の諸方面」という論文である。<sup>40</sup>「三郷土工芸と手工科」「四 手工科の郷土的取扱」<sup>41</sup>には、地方から自力更生していく信念と、それを支える「農

昭和初期手工教育の実際  
—加茂農林学校における木工による手工教育を探る—  
齊藤 暁子

民美術運動」の考えが反映されている。この論文で彼は、地元産業につながる、農村に於ける農村生活を充たし美化するために、創作構成的芸術を経済まで立ち上げていく生涯教育を展望した手工科と郷土の関係性を述べている。そして、郷土に積極的に進出していく方法を具体的に示している。それが、1) 材料の採取、2) 製作品の展覧会、3) 製作品の産業化、4) 地方との連絡、5) 参考品の蒐集と陳列、6) 卒業生の指導と郷土工芸品生産組合という項目に分かれている。実際に地域の産業と連携して、産業化している。このことは工費稼ぎというより、やはり地方の産業の立ち上げという要素が濃く、地域に馴染んだものであった。工場から講師を招いたり、また卒業後も手工科の授業経験者が、郷土工芸品生産組合として、町の後援の下経営したり、研究生、視察員も設けて、生涯につながる教育を展開・実現していた。山本の「農民美術研究所」での教育との共通点が多くみられることから、山下は、この運動理念を熟知していると考えられる。そして、体制の「農村更生」政策とぴったり寄り添う形で、ユートピア的に地方の新構想として、地方の実践化として、取り込んでいくことが可能であった。山下ら地方の有識者は、地域を美的にも経済的にも向上させる最適な教育として、具体的な方法論を展開できる「農民美術運動」と「手工教育」が当時の教育と経済の国策としての郷土化の中で複線的につながっていった。中西の実業による地域の教育実践のスタイルには、この山下のビジョンが大きく影響していたと思われる。

#### 4. 郷土化のなかで手工教育が目指したもの

本研究では、主として、関連文献の考察によって、昭和初期における岐阜県加茂郡での木工による手工教育実践を一実践家の教科を通しての教育観を表した授業試行から、その教育実態を探った。このことによって、昭和初期岐阜県において行われた木工による手工教育の、確かな技術指導を通しての生活理解やものの考え方を教える現実的役割と、単に職人の徒弟制度の中での技術の伝達とは明らかに違う、より創意工夫を大切にしたり、教育的で子どもの表現に寄り添う形での理科的手工の実践であったことを窺えるものとなった。

本研究を進めるにあたって、岐阜県の農村更生の実業教育として加茂農林の長尾和男の実践資料とともに、山下泰助の実践資料を提示した。これらの資料の位置付けと考察をすると、岐阜県の木工による手工教育の実践の当時の盛り上がりを見ることが出来る。

「農民美術」としての山本鼎の手工・工芸に対する考えや、「民芸運動」、「創作手工」などの流れを、公教育に実現しようと岐阜県北部の飛騨地域の手工教育と、木を産業化によって生かし、農村更生につなげていく岐阜県南部美濃加茂地域の手工教育の取り巻く環境の違いがあった。

しかし、それらが同時期に教育実践者の高い技術に支えられて、展開されていた。しかし、その後加茂では衰退し、高山・古川では鉄道開通後も、地場産業とつながり残っていき、戦後も発展していった。

日本人が「日本的」芸術に気づき、単に生活者を守る日本尊重ではなく、独自の視覚文化を生活の中で認め始めた時代が大正の「民芸運動」<sup>42</sup>の中に認められる。その価値は、自らが立つ文化を視覚的にも過程的にも理解していく重要な要素があると考えられる。そしてこの時代は、農村更生として「農民美術」を各地でうたった時代でもある。<sup>43</sup>その中でも、画家山本鼎が信州に展開した農民美術運動<sup>44</sup>は、有名なところである。「民芸」「農民美術」どちらも「人々の生活の美的豊かさ」についてアプローチした、わが国の手工教育の変遷を語る上で、その背景にあるものづくりに関わる大きなムーブメントであった。次第に手工教育が盛んに進められた背景には、森有礼の意向<sup>45</sup>を脈々と受け継ぎながら、文化の再認識のデモクラシー、プロレタリアなどの思想が作用していなかったのだろうか。と筆者は、当初考えたのである。しかしむしろ、体制に近い、産業に密着したところで、農民の生活、日常に目を向ける啓蒙活動として、二つの活動は捉えられ、農民の生涯教育の形で存在が大きい。教育は教育の体制の中で独自に発展していたと考えられる。しかし、互いが同時代に並行して活発化した要因は、「郷土化」という地方を開発する地域主眼の考え方にあるのではないだろうか。地方・地域の活性化が、しいては直接国民を満たし、富国そして郷土を愛し、強兵に導くという体制の考えに飲み込まれた形で進んだのである。白樺派が具現しようとした「ユートピア」のように交流のない独立した形では消滅してしまうが、流通しながら成長を図るには、きっとこの「郷土化」の方法論は、政治も含めて産業も含めてのユートピアを教師達には、実現可能に想定できたのではないだろうか。

当時の体制化での教育の流れを「教育の生活化」の意味の変化で追って郷土教育と図画教育のから著している橋本泰幸の見解を引用する。

「政府は大正末から、昭和初期にかけての深刻な農業恐慌に対して『農村の自力更正』政策を打ち出す。

文部省はそれと結び付けて『郷土教育』を採用した。ここでの郷土教育は『画一化の打破』『教育の実際化』『教育の地方化』を主旨とする。文部省及び各師範学校は、これによって郷土愛を育て、それを核にして同心円的に愛国心を育てようとしたのである。これを主観主義的郷土教育という。

ここでは、郷土を現実的矛盾の対象としてではなく、主観的、心情的次元で捉えているところからこう呼ばれたのである。換言すると郷土教育は、「労作」「体験」「直観」同様に、学習方法上の一つの原理とされたのである。

他の一つは大正期の民間運動の流れの延長上にあるもので、特に地方の教師達によって支持された客観主義郷土教育である。

郷土愛や愛国心の鼓吹では克服しようのない農村の窮乏を目の当たりにしていた彼らは、郷土を心情的愛の対象ではなく、真実の生活を捉えるための教材としたのである。

そして全教科で主観主義郷土教育を行うとした文部省に対し、客観主義郷土教育の支持者達は、郷土科の特設を主張し、独立した教科としてこの教育を実現させようとする。しかし結局それはできず、次第に強まる日本精神の強調を求める教育の流れの中で、愛国心教育の有効な手段として変化していくのであった。

この官民二つの流れに共通するのは「教育の生活化」というテーマであった。そして官側ではこの「生活」を、心情的・抽象的に捉え日本主義教育の一つとしたのに対し、民間運動の中での「生活」は、実証主義的知識の対象として、あるいは又、社会科学的に捉えられるべきものとして考えられ、その教育実践が展開していくのであった。

教育の生活化/学校教育を「生活教育」とする考え。「生活教育」の特質は、1、教育における権威主義、形式主義、知識の注入を排除し、子どもを主体的な生活者として、教育のあり方を考えるものと、2、教育を知識の教授に限定せず、実生活から学び生きて働く学力の内容を迫りしそれを身につけるものとする二つがある。前者は経験主義に立脚する教育、後者は生活現実に挑戦する民主主義教育の基本とされる。<sup>46</sup>（ママ）

この郷土教育による教育の生活化は、さらに、生活画や生活つづり方、生活版画などによってよりリアリズムへと進化していく。<sup>47</sup>しかし、手工科においては、想画や生活画などにみられる感情と知的融合の中から敬称が生まれるといった、つきつめて生活を直視する思想には近づけなかった。むしろ、産業につながる、建築、デザイン・構成へと近づいていったのである。

中西忠節や山下泰助ら、飛騨の手工教育実践者は、山本鼎の農民美術運動に影響を受け、鼎の時代や地域よりも、地域の産業をベースに環境として持っていたこともあって、ある程度の教育成果としての形が見られた。その後、中西が、戦後、版画教育に携わって、更にリアリズムへ向かった時も、図案化し産業に還元していった。その発想は、手工教育と同様に、脈々と郷土化による人間教育を実践し、生活の中での実践者独自のリアリティを確立していたことがわかる。言い換えると、この地域の子供達にとっての必要な力をつけることで、子どもの生活自体にリアリティを持たせる学習を地域の中で展開していく。そのことで郷土観や郷土愛を育てていく教育姿勢を一貫して持っていたということである。

## 5. 結論

本研究は、まず昭和初期当時の実際の現場教師の実践を顕現化することが最大の特色である。戦前の手工教育の実際を知る人々が現存してものづくりをしている実態と、教育センターが各県に配置され地方の教育実践が集約される以前の実践記録は、各小中学校の書庫に残るのみであることがこれまでの研究調査の中で明らかになった。現地の学校を訪ねることによって同時に土地の風土・歴史・産業に調査を広げることができる。このことは、手工が常に生活・産業との境界線で実践されてきた特徴に由来する。

手工教育100周年の年に、石原英雄は、『工作・工芸教育の新展開』において、現場教員の問題にもふれて、手工の歴史の概要を著した。そしてこの歴史を、苦闘の歴史と評している。実際の実践者が、手工教育をどのように展開し、そしてそれは衰退したか、もしくは変化したかを追う中で、地域で展開したものづくりの教育原理を、どう評することができるかが興味深い。

その場合、教育・芸術をめぐる思潮研究も必要とされる。そこで、手工教育実践史の背景にみられる、民衆美術運動の実際と、論争にも触れたいと思う。「民藝」と、「農民美術運動」である。

中村義一は、「V民衆美術運動の〈哲理〉—自由画教育論争」、『続日本美術論争史』、求龍堂、昭和57年のなかで、地方観に倫理の根源を求める運動であった「農民美術運動」が、「自由画運動」から離れてしまったことによって、この運動の真意が見落とされることになっていったことを指摘している。勿論独立して「自由



昭和初期手工教育の実際  
—加茂農林学校における木工による手工教育を探る—  
齊藤 暁子

画運動」についても「彼の最大の感化は、児童画のもつ美的価値と、それを感得する教師の美的感受性の尊重である。単なる〈成績〉にすぎなかった子どもの絵が、初めて純粹に見られ、鑑賞されるものとなった。」<sup>48</sup>と、背後の教育思想の支えも含めて論及し、評価している。しかし、まさに、米騒動があった年、武者小路実篤が「新しき村」の建設にとりかかった年からスタートした民衆美術運動は、地方的でなくなり、とうてい「〈国家〉からの〈地方〉の分離と自立を山本の意図を越えて指向する（中略）明治教育に対するアンチテーゼとみ、ここに苛酷な時代を切り開く民衆の自発性の根」<sup>49</sup>をよみとれる運動ではなくなってしまった。と、苦評している。

そして、同じく「白樺」理想主義の武者小路との比較、柳宗悦らの民芸運動とのすれ違いを指摘している。

「民藝」は、「農民美術運動」を次のように捉えている。「日本農民美術建業の趣意書」<sup>50</sup>をあげて、それが、本来の農村に残る美ではなく、都会向けに作品を創ったことから、「民藝」の考え求める「美」とはまったく別と、農民美術運動を認識し、「地方観」の明らかな違いを指摘している。<sup>51</sup>民藝の趣意書からは、工藝は、単に農村の副業としてではないのだ。民藝運動は、国民の啓蒙運動であり、常に文化運動であろうという意思が現れている。しかし、工藝を農村の副業として実際に運動を興した山本鼎には、批判ではなく、反省点を提示してくれた先人として尊重して扱っている。ここで、京都帝国大学農学部木材工藝研究室を中心とした「日本木工芸協会」を立ち上げている加藤正育の、農民美術の考察が参照されている点も興味深い。加藤の考える木工芸観には、「民藝」の観点からは程遠いものづくり観があるのである。木という地方の産物を最大限に工業化、産業化によって、生かし、農村更生につなげていきたいという理想のものとの視点が協会にあるからである。民藝運動も体制に寄り添った形で、現状の肯定からの出発の芸術運動であった。近代化、工業化に真っ向から対決するのではなく、甘受しつつ、民芸品の蒐集と、展覧によって、美術品として、日用品に視覚文化価値を与え、職人の地位向上において間接的に近代に抵抗し、日本の日常美を付加価値によって、生活から遠ざけていくことで守っていったという本来の趣旨からのずれを残している。

地域の実践に出会い、当時の時勢や地域産業と照らし合わせていく作業の中で、昭和初期の手工教育実践者は、地方と都市の経済並びに教育の格差、農地改革以前の小作農を抱える誠に貧困きわまる当時の農村の経済機構・共同体の行きづまりの現状にぶつかることとなった。<sup>52</sup>手工教育の実像が明らかになっていくことで、翻弄される公教育としての手工教育の側面とは別に、実践者によって確実に教育効果をあげているといえる。そしてそれは、大きく3点によって為されていた。「地域のニーズと、生活者としての子どもの願い、教師が実現したい教育が、必然的に重なった教育課題」「単に職人の徒弟制度の中での技術習得とは違った、教育としての技の学びが子どもに保証されていたという教育内容」「職人となった教え子の中に、『ものづくりの基本を教わった。』という実感が残っている教育成果」である。

昭和初期当時、確かに教師にはかなり高い技術が必要とされており、教育実践者にはそれがあった。しかし、彼らの中心にあったのは、実践を貫く、そこに住む生活者としての、地域に対する深い愛情と、地域の担い手を育てる熱い使命感だった。

しかし、実践から語られるべきものが、まだ残されているのである。それが、手工教育実践史を通して変化せず流れる「教育原理」である。人間を見る眼が変わった現代でも、実践者が「正確な知識と技術」を自発的自主的な作品の制作課程の設定のもと、訓育陶冶によって子どもに伝えていった原理こそ、教育実践から顕現化されるものである。

公教育として、子どもが、ものづくりを通して獲得していくべき、確かなものの見方考え方を、今後実践の分析と、実際つくられた教材からも言及することとする。

## 註

<sup>1</sup> 山形寛 『日本美術教育史』黎明書房、1967年、p.22

<sup>2</sup> 日本手工研究会編『手工研究 手工教育五十周年記念号』、1935年、p.17

<sup>3</sup> 同上、p.18

<sup>4</sup> 橋本泰幸 『日本の美術教育』明治図書、1994年、pp.121-122

<sup>5</sup> 山形寛『手工 工作教育被欺史』国際学童美術研究会刊、1959.10.25、pp.1-4

宮脇理『工藝による教育の研究』建帛社、平成5年、pp.574-576

<sup>6</sup> 1930年、サンフランシスコ生まれ。カリフォルニア大学バークレー校教授。現代アメリカを代表する詩人。ピューリッツァー賞ボリンゲン賞を受賞、主著に『亀の島』『ノー・ネチャー』などがある。

- <sup>7</sup> 原 成吉「野生の実践者ゲーリー・スナイダー」参照、『現代詩手帖3』, 思潮社, 1996年
- <sup>8</sup> 阿部七五三吉によると「手工教育も種々の事情や誤解などが因となって漸次創始者たる森文部大臣の意図に遠ざかり、何時しか職業的機械的教授の色彩を帯びるに到った。」と『手工教育原義』の第四編「日本手工教育史」に記述している。手工科は、明治期の実利主義の教育の先に沿って仮設され、子どもも興味を持ってきたが、手足を労する仕事をいやしむ風潮と、スパンサーなどの実利主義的教育思潮の後退によって、工賃の稼ぎをする実践もあって、行き詰まりをみせていた。(山形寛『日本美術教育史』黎明書房, p.159-160)当初の森文部大臣の考えていた小学校や、師範学校における手工教育は、中学校の工業とは目的を同じくしていなかったのである。むしろ、普通教育として定着を想定したと考えられる。森文部大臣の暗殺は、手工教育の発展に、痛手を与えた。
- <sup>9</sup> ここでは、特に大正8年に霜田静志が発表した「図画手工総合教授案」を指している。明治30年代後半から、図画手工の連絡の動きが起こっている。岡山秀吉、棚橋源太郎など、図画教育調査委員による報告にみられる。阿部七五三吉は、反対の意を示している。橋本泰幸『日本の美術教育』明治図書, 1994年, pp.81-102 孫賢秀「図画手工の合一過程についての一考察—造形教育における霜田静志の位置—」東京藝術大学 美術教育研究会編『美術教育研究』No.4, 1998年, pp.17-30
- <sup>10</sup> 大正8年4月に第1回児童自由画展覧会が、長野県神川村神川小学校で開かれたことによって始まった運動。画家山本鼎が、フランス留学帰途モスクワで観た「児童画展覧会」による影響が大きい。橋本泰幸『日本の美術教育』明治図書, 1994年, pp.85-120
- <sup>11</sup> 岡山秀吉の科学教育と発明・工夫を柱とする手工教育や理科の手工とは違い、芸術教育、児童中心主義を柱とする「創作手工」は、自由手工、芸術手工ともよばれ、石野隆らによって協会も発足された。石野は手工科の使命を「模索主義を排して、極力新の生命美に触れる創作に依ることが根本」(『児童美術創作手工の実際』集成社, 1923年)と述べ、図画手工合一論を主張した。しかし、本来手工には、どちらの要素もあり、分断したことによって、子どもを子ども扱いたものづくりになってしまったと、筆者は考える。むしろ、子どもを全人的に考えると、前者の手工も生活者として必要で、大人が作り上げた「子ども象」が限定した、造形文化を作り出したとはいえないかと考える。佐々有生編著『図画工作・美術教育の理論と実践』教育情報出版, 2000年, pp.76-77
- <sup>12</sup> 山形寛『日本美術教育史』黎明書房, 1967年, pp.575-590
- <sup>13</sup> 同上, p.569
- <sup>14</sup> 『官報』第4096号 大正15年4月22日  
菅生均「大正自由主義教育期の手工教育に関する一考察」, 『アートエデュケーション no. 26』建帛社, 1996年, pp.63-64
- <sup>15</sup> 土方苑子『近代日本の学校と地域社会—村の子どもはどう生きたか—』東京大学出版, 1994年, 参照
- <sup>16</sup> 竹内誠・佐藤和彦・君島和彦・木村茂光編『教養の日本史』東京大学出版, 1987年, pp.248-251
- <sup>17</sup> 日本木材工芸協会 京都帝国大学農学部, 丸三書店, 昭和8年刊行。
- <sup>18</sup> 石野隆『児童美術創作手工の実際』集成社, 1923年, p.24
- <sup>19</sup> 鷺山靖「3.石野隆らによる『創作手工』の出現」, 佐々有生編著『図画工作・美術教育の理論と実践』現代教育社, 2000年, pp.76-77
- <sup>20</sup> 「昭和初期岐阜県高山市の手工教育の実際」, 齊藤暁子, 『平成19年度大学美術教育学会誌』, 2008年, 参照
- <sup>21</sup> 伊藤信一郎は、長崎師範を経て、岐阜師範で教鞭をとっており、その後の岐阜師範の手工科の発展に大いに影響したことを、「手工研究 手工教育50周年記念号」のなかで鈴木孝英が紹介している。また、伊藤の主著である『工業大意』を教科書として、実際使っていたことを、高山西尋常高等小学校で工業科の手工の授業を受けていた第一期生の山田光郎が記憶していた。石原英雄・橋本泰幸編著『工作・工芸教育の新展開』ぎょうせい, 1986年, p.48
- <sup>22</sup> 千島久治は、岐阜県師範学校訓導で全国図画手工教員協議会で「手工における工業趣味養成に就いて」という意見を述べている。山形寛『日本美術教育史』, p.582
- <sup>23</sup> 岐阜師範学校講師。「岐阜師範学校における手工設備の思い出」日本手工教育研究会編『手工研究』手工教育五十周年記念号, 1935年, pp.106-108  
『岐阜大学学芸学部同窓会第一回總會 岐阜師範学校創立七十七周年記念祝典 記念号附会員名簿』岐阜大学学芸部同窓会, 昭和22年
- <sup>24</sup> 山形 前掲書, p.582  
日本手工教育研究会編『手工研究』手工教育五十周年記念号, 1935年, pp.106-108  
富岡卓博『岐阜県における手工教育黎明期に関する史的研究』1・2・3, 岐阜大学教育学部研究報告 人文科学 第43巻 第2号 別刷, 1995年
- <sup>25</sup> 山形 前掲書, pp.621-632
- <sup>26</sup> 日本手工研究会編 前掲書, pp.106-107
- <sup>27</sup> 石原・橋本編著『工作・工芸教育の新展開』ぎょうせい, 1986年, p.43
- <sup>28</sup> 同上, pp.47-48
- <sup>29</sup> 『岐阜大学学芸学部同窓会第一回總會 岐阜師範学校創立七十七周年記念祝典 記念号附会員名簿』岐阜大学学芸部同窓会, 昭和22年  
富岡 前掲書  
飛騨ニュース昭和34年2月18日『版画の中西氏が教育文化賞うく』
- <sup>30</sup> 同上

昭和初期手工教育の実際  
—加茂農林学校における木工による手工教育を探る—  
齊藤 暁子

- <sup>31</sup> 日本木材工芸協会『日本木材工芸 第2巻』京都帝国大学農学部, 丸三書店, No.8 Feb 1935年, (pp.64-65)pp.684-685
- <sup>32</sup> 日本木材工芸協会『日本木材工芸 第1巻』同上, No.4 Dec1933年, (pp.67-70)pp.343-346
- <sup>33</sup> 日本木材工芸協会『日本木材工芸 第4巻』同上, No.13 Aug1936年, (pp.76-78)pp.1129-1131
- <sup>34</sup> 同上
- <sup>35</sup> 同上
- <sup>36</sup> 明治15年3月に月刊誌として創刊号となる『岐阜県教育会雑誌』は, 大正4年10月第255号より『岐阜県教育』と改題, 昭和15年3月第555号まで続いた岐阜県教育会発行の教育雑誌である。
- <sup>37</sup> 山形 前掲書, p.585
- <sup>38</sup> 富岡卓博『岐阜県における手工教育黎明期に関する史的研究』1・2・3, 岐阜大学教育学部研究報告 人文科学 第43巻 第2号 別刷, 1995年, 参照
- <sup>39</sup> 同上3, 岐阜大学教育学部研究報告 人文科学 第45巻 第2号 別刷, 1997年, p.55 引用
- <sup>40</sup> 学校美術協会編『郷土化の図画手工』, 昭和6年, pp.225-239
- <sup>41</sup> 同上, pp.229-230
- <sup>42</sup> 大正15年の「日本民芸美術館設立趣意書」にはじまる『白樺』派の柳宗悦らの運動
- <sup>43</sup> 加藤正育は「日本の農民美術」の中で(1)長野県小縣郡神川村の日本農民美術研究所, 山本鼎の発起経営に属する系統。(2)北海道八雲の農村工芸研究会, 徳川義親の発意で八雲農場の同人組織に属する系統。(3)青森県南津軽郡大光寺村の農閑工芸の系統をあげている。
- <sup>44</sup> 山本鼎は, 大正9年に本運動を考えていた。農民美術とは, 農民にとって芸術的であるとともに産業的(農民の副業となる)製品を意味する。農民美術教習所を長野県佐久に作り, 東京より工芸家を呼び農閑期3ヶ月間の教習の後, そこでの製品を販売した。民芸運動が日常雑器に美を見出す享受の喜びの覚醒であったのに対し, 農民美術はつくる喜びを知らしめようとしたといえる。
- 橋本泰幸『日本の美術教育』明治図書, 1994年, p.103より引用
- <sup>45</sup> 日本手工研究会編 前掲書, p2より引用
- <sup>46</sup> 橋本 前掲書, 第7章「生活画教育の時代」1 郷土教育と図画教育より引用, pp.121-122
- <sup>47</sup> 橋本 前掲書, pp.136-137
- <sup>48</sup> 中村義一著「V 民衆美術運動の<哲理>—自由画教育論争」, 『続日本美術論争史』, 求龍堂, 昭和57年 p.151
- <sup>49</sup> 同上, p.159
- <sup>50</sup> 中村精著「農村手工藝運動の意義—農民美術より民藝への展開—」, 『工藝』百八号, pp.49-51
- <sup>51</sup> 同上, pp.53-56
- <sup>52</sup> 西田美昭, 『近代日本農民運動史研究』, 東京大学出版会, 1997年, 参照